坂東眞理子著

『親の品格』

押谷由夫

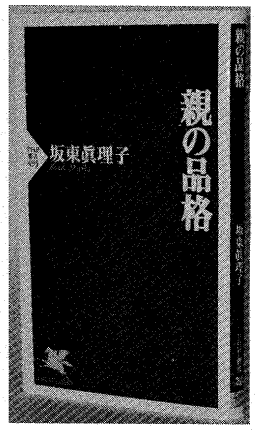
混迷する家庭教育への福音の書

「子は親を育てる」

冒頭の「はじめに」に添えられた言葉です。家庭教育の極意を見事に示されているように思います。本書は、家庭教育について正面から書かれているわけではありません。しかし、親としてのあり方は、当然に家庭教育のあり方を示すことになります。本書を読んで、まず感じたことは、「混迷する家庭教育への福音の書」である、ということです。まずは、このような視点から、本書を紹介させていただきます。

1　女性の生き方、親の生き方

品格という言葉は、難しいようですが、実は日常生活でもよく使われます。「あの人は品がある」「もう少し品よくしなさい」「下品な行動は慎みなさい」などというときの品は、品格と同じ意味をもつと考えられます。



2008年1月7日発行
PHP研究所
新書判　240頁
定価 720円（本体）

私たちは、いろんな行為をするとき、何かを基準に考えます。我が国では、伝統的に品という基準を大切にしてきました。それは何ですかといわれると、明確には答えにくいのですが、その人がかもし出す独自の美意識、道徳心ということができるでしょうか。

品格は、その人の生き方と直接にかかわります。『女性の品格』とは、女性の生き方、『親の品格』とは、親の生き方と読み替えることができます。その生き方は、単なる生き方ではなく「品のある生き方」ということになります。

「品のある生き方」は、だれもが求めることです。昔であれば日常生活の中で自然と受け継がれてきたという側面が強いのですが、今日では、価値観の多様化のもとにあやふやになってきています。そのようななかにあって、本書はまさに悩める親の福音の書であるといえます。事実、本書は、『女性の品格』とともに、ベストセラー本として広く国民に受け入れられています。

2　生命、マナー、人間性を育む

では、「品格のある親の生き方」とはどのような生き方でしょう。本書では、まず、子どもの生命とマナーと人間性を育むことを述べています。

唐突ですが、平成18年12月に我が国の教育の指針を示す教育基本法が、59年ぶりに改正されました。その中で特に強調されているのは、人格の形成と学校・家庭・地域連携の教育です。幼児期から人格の基礎を養い、生涯にわたって、人格を形成・錬磨し、豊かな人生を送ることができるように教育システムを確立しようと提案しています。そして、子どもの教育においては、両親及び保護者が第一義的責任を負わなければならないことも明記されました。その実現に向けて、教育振興基本計画にまとめ、国会に報告することになっています。その案が最近まとまりましたが、今ひとつ国民にはぴんと来ない所があります。「責任をもたされても、どうすればいいのかわからない」では困ります。

それを本書は、見事に描いています。

まず、子どもたちが本来もっている生命力をまっすぐ伸ばしていこうと提案されます。具体的に

は、挨拶をする習慣を身につける、みんなで楽しく食事をする、清潔を保つ習慣を身につける、ことを求めます。そして、親の姿勢としては、子どものわがままを矯正していくこと、ものをいとおしむこと、両親が協力すること、親子で一緒に歌い・読み・自然を楽しむこと、の大切さを述べています。

次にマナーです。具体的には、お辞儀をする、江戸しぐさ（相手への気遣いのある行為）を身につける、環境配慮の生活習慣を身につける、毎日続けられるよい生活習慣をもつ、自分のことは自分でできる、ことを求めます。そのために、親のあり方として、ほめて自信をもたせること、一貫性を大切にすること、手伝いをさせること、乗り物の中では立たせるようにすること、お客を家に招くこと、子離れを考えること、社会規範を身につけさせて後に個性の育成を考えること、などの必要性を指摘されます。

3つ目は人間性です。特に、子どもが、人から信頼されるようになること、自分に自信がもてること、責任が取れること、が大切だと述べています。そのためには、親の姿勢として、約束を守ること、悪口を言わないこと、差別をしないこと、素直にほめること、ごまかさないこと、ほめて自信をもたせること、自分の職業についてきちんと話すこと、正しい日本語を話すこと、自分のしたことに責任をとらせること、子離れのしたくをすること、父親も子育てに加わるようにすること、を挙げられています。

ここまでで「品格のある親のあり方」の基礎基本を、子どもの姿を描きながら理解することができます。

3　成長に応じた子どもへの対応

第4章以降は、子どもの成長に応じた対応の仕方について述べられます。それは今日的社会の中でさまざまな課題を抱える子どもたちに寄り添った親自身の生き方を提案することになります。

まず、子どもが小学校に入学すると、親としてのいろんな対応が必要になります。ここでも一貫して述べられていることは、先生との信頼関係の確立、子どもの自立への援助（けんかのルールを身につける、いじめをしない子に育てるなど）、保護者や学校・地域とのかかわり（母親同士の付き合いや学校行事や地域の年中行事への参加の工夫）です。

また、ティーンエイジャーとなった子どもには、発達段階に応じた自立への援助の仕方として、ボランティアやホームステイなど具体的な体験を提案されます。思春期の荒れへの不安、ニートへの不安、家庭内犯罪への不安など、今日の親の悩みにも的確に答えています。さらに、親の大きな課題である情報との接し方においても、本、新聞、雑誌、情報機器にわたって、子どもの成長と自立への支援をベースとした、品のある対応を分かりやすく述べています。

そして最後は、「成熟した親子関係をつくる」で結ばれています。そこには、子どもの結婚、子どもの配偶者との付き合い、介護を受けるときの心構え、自らの遺言、にわたって、親として、女性としての品格のある生き方を述べられます。その中で、社会的ＤＮＡを伝えるという使命感と感謝の心（祖先を大切にすることを踏まえて）をもつことの大切さを強調されています。

本書の紹介をさせていただきながら、改めて気づくことがあります。それは本書に込められた坂東先生の願いです。冒頭に紹介した「子が親を育てる」という言葉は、女性としての品格のある生き方を求めていく上において、「家庭をもち子どもを育てることはあなたを一段と輝かせることになるのですよ、そのためにも男女共同参画社会が必要なのですよ」というメッセージでもあると捉えられます。本書を読んでいると、そのような女性の生き方（姿）が目に浮かんでくるのです。すべての学生にぜひ読んでおいてほしいと心より願う次第です。（おしたに　よしお　初等教育学科）